

# Nara Women's University

No.009

メタデータ	<p>言語: Japanese</p> <p>出版者: 奈良女子大学アジア・ジェンダー文化学研究センター</p> <p>公開日: 2014-09-22</p> <p>キーワード (Ja): シンポジウム「クィアと文学」, シンポジウム「近代アジアの出産と介助者-ジェンダーの 視点から-」, プロジェクト研究「帰国留学生のキャリア形成とライフ コースに関する調査」, 視覚表象をジェンダーの視点から研究すること, 台湾女性研究者によるジェンダー講演会, 調査研究「進路選択に及ぼすジェンダーの影響」その後, 奈良女子大学女性教員数2010</p> <p>キーワード (En):</p> <p>作成者: 奈良女子大学アジア・ジェンダー文化学研究センター</p> <p>メールアドレス:</p> <p>所属:</p>
URL	<p><a href="http://hdl.handle.net/10935/3804">http://hdl.handle.net/10935/3804</a></p>



## アジア・ジェンダー文化学研究センター第9号 目次

- |   |  |
|---|--|
| ● アジア・ジェンダー文化学研究センター、ついに専用室を開設！ — 1       | ● プロジェクト研究<br>「帰国留学生のキャリア形成とライフコースに関する調査」 — 10 |
| ● シンポジウム<br>「近代アジアの出産と介助者—ジェンダーの視点から」 — 2 | ● スリランカから — 11                                 |
| ● シンポジウム「クィアと文学」 — 4                      | ● 視覚表象をジェンダーの視点から研究すること — 12                   |
| ● 台湾女性研究者によるジェンダー講演会 — 6                  | ● 奈良女子大学女性教員数2010 — 13                         |
| ● 調査研究<br>「進路選択に及ぼすジェンダーの影響」その後 — 8       | ● 2009年度のセンターの活動と編集後記 — 14                     |

## アジア・ジェンダー文化学研究センター、ついに専用室を開設！

新センター長 野村鮎子

はじめまして。2009年4月より、奈良女子大学アジア・ジェンダー文化学研究センターのセンター長を務めております野村鮎子と申します。所属は文学部、専門は中国古典文学・中国/台湾女性史です。

まず、最初にみなさまにお知らせするニュースがあります。本学のアジア・ジェンダー文化学研究センター (Center for Gender and Women's Culture in Asia) は、2009年11月、コラボレーションセンターの2階Z202に専用室を開設いたしました。本センターは2000年、丹羽雅子学長の時代に「アジア生活・ジェンダー研究センター準備室」として出発、2005年11月、ようやくセンターとして正式発足いたしました。その間、専用の部屋はなく、急ごしらえの小さな看板を前センター長岩崎雅美研究室のドア横に掲げていました。4月にその看板を引き継いだ私は、この間までそれを文学部の個人研究室のドアに掛けておりました。

国立大学の財政事情が厳しいこの時期に、専用の部屋をいただくことができたのは、ひとえに野口誠之学長、佐久間春夫副学長のご配慮の賜物ですが、一面ではセンターに昇格してから5年、活動を開始してから数えて10年間の、センター員による地道な活動が認められた結果でもあります。また、センターの開室に伴い、4月からは非常勤の特任助教の配置も認められました。今後はほぼ毎日、助教がセンターに常駐いたします。

これまで本センターをご支援くださっている国内外の皆様は謹んでご報告しますと同時に、新センター室へのご来駕を是非お願いいたしたいと思います。

また、センターではプロジェクト重点研究として、今年度から5ヵ年計画事業「帰国留学生のキャリア形成とライフコースに関する調査」をスタートさせました。女性のキャリア形成の視点から、本学に留学した学生たちが帰国後にどのような職につき、どのようにキャリアを形成し、どのような人生を歩んだのかについての調査を行うものです。帰国留学生たちのネットワーク (海外同窓会のような組織) 形成につなげたいと思っています。調査は帰国生への聴き取りと、奈良女子高等師範学校時代から引き継がれてきた文献史料の両面から進める予定です。今年度実施した訪問聴き取り調査の一部は、本号10頁の松岡教授の報告に紹介がありますので、そちらをご覧ください。

奈良女子大学は2009年5月に開学100周年を迎えました。記念すべき年にセンターを開室できたこと、過去100年の間本学がアジアで果たしてきた役割を考える帰国生調査のプロジェクトが発足したことは、まさに天の配剤でしょう。将来的には、この調査結果をまとめて公開する予定です。今後は、留学生資料収集や調査のために国内外の関連機関にお邪魔することがあるかもしれません。どうか、今後とも本センターの研究調査にご協力・ご支援をお願いいたします。

### アジア・ジェンダー文化学研究センター

場所: コラボレーションセンター2階Z202  
電話: 0742-20-3611 FAX: 0742-20-3612  
E-mail: a-gender.c@cc.nara-wu.ac.jp

| 公 | 開 | シ | ン | ポ | ジ | ウ | ム | 報 | 告 |

# 「近代アジアの出産と介助者—ジェンダーの視点から」



奈良女子大学アジア・ジェンダー文化学研究センター、ジェンダー史学会共催  
(奈良女子大学創立百周年記念事業)

於：奈良女子大学 2009年6月6日(土) 13:00~17:00

報 告

## 「なぜ産婆は専門職化に失敗したのか—戦前の「産師法案」をめぐる動きを通して」

松岡悦子 (奈良女子大学生活環境学部教授)

## 「近代台湾における「産婆」の民衆史—産婆と産科医の相互関係を中心に」

傅大為 (台湾・陽明大学STS研究所教授) 翻訳・代読：羽田朝子 (奈良女子大学大学院博士後期課程)

## 「近代中国における産科医と助産士の境界をめぐるポリティックス」

姚毅 (フェリス女学院大学非常勤講師)

コメント：石崎昇子 (専修大学非常勤講師) 司会：野村鮎子 (奈良女子大学文学部教授, センター長)

この公開シンポジウムは、奈良女子大学アジア・ジェンダー文化学研究センターが奈良女子大学創立百周年記念事業の一貫として、昨年度から準備を進めてきた企画であった。ところが、シンポジウムが近づいた5月中旬、大阪・兵庫において新型インフルエンザの感染が拡大し、18日には小・中・高に一斉休校という措置がとられる事態となった。奈良県下では感染者が出ていなかったものの、大阪での流行が海外で大きく報道されたことから、台湾の傅大為教授の来日がキャンセルされ、急遽、原稿の代読という形に変更せざるを得なかった。

このような事情から当初は参加者数の減少も懸念されたが、当日の会場は大盛況で、参加者数は60名にもなった。冒頭、佐久間春夫副学長から挨拶があり、その後、各報告者の発表ののち、最後にコメント・質疑応答に移った。当日の報告内容は以下のとおりである。

最初に松岡悦子氏から、戦前の日本の「産師法案」をめぐる運動について、報告があった。「産師法案」運動とは、大正14年に大阪の産婆たちが、産婆の業権確保をめざして立ち上げた運動である。それまで郡や市という小さい単位で存在していた産婆組合が、全国組織の大日本産婆会へと統一されていくのは、この産師法案の運動の過程でのことである。

この産師法案は、結局戦時体制の中で成立を見なかったのだが、この運動の過程をとおして、当時の産婆たちが置かれていた状況が非常に鮮明になる。まず、大正末から昭和初期にかけての労働者階級の増加とそれに対応するための無料産院や赤十字社などの社会事業の



ジェンダー史学会会長 小檜山ルイ氏あいさつ

展開が、産婆に危機感を抱かせていた。村落部では、素人産婆の存在が免許持ちの産婆の専門性を阻んでおり、他方では医師が正常産にも手を出して産婆の職能範囲を侵犯していた。男性の医師たちは、各府県産婆会の会長職につき、産婆自身が会長になるのを快しとしなかった。産婆たちは何とか社会的地位を向上させようと、産婆試験の全国統一と、産婆の資格を高卒に限るように運動するが、政府は産婆の資格をそこまで高める必要はないとして反対する。かつ、産婆会内部にもさまざまな内紛があり、専門職集団としての統一性をとることができなかった。結局、産婆たちの熱の入った運動にもかかわらず、産師法は国民医療法に組み込まれ、産婆たちの思いは戦時体制に呑み込まれてしまう。

松岡氏の報告の後、上述の事情で欠席された傅大為氏に代わって、奈良女子大学大学院生の羽田朝子氏が、傅氏の近代台湾における産婆の民衆史についての発表原稿を翻訳し、代読した。

台湾では、日本統治期に専門教育を受けた新式の産



婆が登場し、その結果、民間で活躍していた阿婆(伝統産婆)は、医学的知識に乏しい者として「汚名化」の歴史をたどった。たとえば、産科医は新生児の破傷風による死亡率の高さの原因を阿婆に求めることで、新式産婆養成の必要性を説いたが、死亡率の算出方法には問題があった。当時の新生児の主な死亡原因は、生活困窮や栄養不良などによるものであり、阿婆に責任を負わせることはできない。それどころか、民間で流行した通俗歌謡集「歌仔冊」には、産婆の活躍を讃える歌があり、産婆に対するプラスイメージが看取される。また、男性産科医が妊婦の心理的抵抗感を和らげるために女性産婆とともに開業する例も多く、戦前の産婆は出産介助者として重要な役割を果たしていた。しかし、戦後になると状況が変化する。台湾に移住した外省人の女性(多くは出産年齢にあり、その数は25~30万)は国民党国家に近い立場にあり、台湾の産婆にはなじみがない。公務員保険や眷属保険によって、出産のときには産科医にかかる傾向があり、産婆は消滅の運命を辿った。

最後の姚毅氏の報告は、近代中国の産科医と助産士(中国では助産士と称する)についての考察である、同じアジアでも中国の状況は日本や台湾と大きく異なっている点が印象的であった。

一般に産科医とジェンダーをめぐる先行研究では、産科医は取り上げ婆から産婆(もしくは助産士)を経て医師へと移行したこと、またそこにあるジェンダー的非対称性がしばしば指摘される。つまり、産科医=男性、助産士=女性であり、男性による女性の管理・支配が強化されたという見方である。しかし、中国では産科医のほとんどは女性で、産科領域の女性化というジェンダー的職業構造が顕著である。背景には女医側の「女性による女性の治療」戦略や、家父長制下の女性患者にとって女医ならば心理的負担が軽いという事情があった。20世紀の中国では近代国家建設のために母子衛生の人材確保が急務だとして、女医・助産士が積

極的に養成された。しかし、助産士の専門職化という観点でいえば、中国では助産士が産科医へ昇格する回路が用意されており、助産士自体の組織化・自律性の獲得には失敗したともいえる。実際1972年には医師養成の量が助産士の数をこえ、助産士の規模縮小や役割転換がおこった。現在の中国では産科医=男性、助産士=女性というジェンダー非対称性を指摘することはできない。これは近代中国が「男女隔離」の伝統的ジェンダー規範を暗黙の前提として受け入れた結果だともいえる。

石崎昇子氏からのコメントは、松岡氏が報告した産師法運動の背景に焦点を絞ったものであった。

日本が1874年に発布した「医制」では産婆は産科医の監督のもとで出産介助を行うとされている。「医制」は、医者も産婆も国家統一試験による有資格者であることを想定していたが、医者がその後統一試験による国家資格の道を歩んだのに対し、戦前の産婆には国家試験はなく、地方首長による免許制にとどまった。「医制」の精神は、医師については徹底されたが、産婆については妥協的であった。結果的にいえば、女の問題は後回しにされたのであり、ここにジェンダーの問題がある。もう一つ、産む側の事情の変化にも注目する必要がある。一般に、戦前は自宅出産、産院での出産は戦後と思われがちであるが、実際は日露戦争後、都市に流入した地方出身の若年工場労働者の夫婦の間では、自宅出産よりも産院で出産する例が増えていた。賛育会のように出産費用が無料のところもあった。このことも開業産婆を中心とする産師法運動の背景の一つである。近年、産科医不足が叫ばれ、子供を産みにくい状況が報告されている。今こそ助産師を専門職としてもう一度明確に位置づける必要があると考える。

紙幅に限りがあり、討論の内容を詳述することができないが、参加者アンケートでは、近代アジアに絞ったことで3地域の状況を比較してとらえることができたという意見が多かった。また、今回のシンポジウムで特に印象的だったのは、現役の助産師さんや最近出産を経験された女性からの積極的な発言があったことである。ややもすれば、当事者を置き去りにしがちなアカデミズムの議論が開かれたものになること、これこそジェンダー史学会の公開シンポジウムがめざすところであり、今回のシンポジウムはその使命を十分に果たしたのではないかと自負している。その後の懇親会(サンドイッチパーティー)にも多くの参加者があり、盛況のうちにシンポジウムを終えることができた。

(文責:野村鮎子)

# 共催シンポジウム 「クィアと文学」

11月29日、文学部ジェンダー言語文化学プロジェクトとの共催で、シンポジウム「クィアと文学」を開催した(後援:台湾・行政院文化建設委員会)。文学部が進めるプロジェクトとの連携は初めての試みであったが、多くの参加者を得て、充実した催しとなった。



シンポジウム「クィアと文学」ポスター

「ジェンダー言語文化学プロジェクト」は、日・中・英・米・独・仏という、文学部が主に扱う各言語と文学に関する、ジェンダーの視点を用いた研究と、授業への反映を目的としている。プロジェクトの取り組みは、シンポジウムなどの研究促進と、授業を中心とした教育からなり、これまでに2回のシンポジウムを開催している。第3回目にあたる本シンポジウムは、台湾セクシュアル・マイノリティ文学研究のわが国における第一人者である白水紀子氏(横浜国立大学教授)の講演を中心に、テーマを「クィアと文学」とし、クィア概念の解説および文学作品への展開について、主として学生に対し、研究の内容と方法を提示することを目的とするものである。

このシンポジウムは、もともと文学部の企画事業ではあるが、台湾文化・文学についての知見と理解を深める機会でもあり、アジア・ジェンダー文化学研究センターの事業としてふさわしいものと考え、共催の形をとることとした。



シンポジウムではまず、本学大学院人間文化研究科に今年度赴任された、中川千帆准教授に「クィアとは何か」と題し、クィア理論に関する基礎概念についてお話しいただいた後、白水紀子氏による講演「台湾セクシュアル・マイノリティ文学概観」を行った。

## 「クィアとはなにか」

中川千帆(奈良女子大学大学院人間文化研究科・准教授)



中川氏にはアメリカ文学研究者の立場から、「クィアとはなにか」について、お話しいただいた。当日の参加者の多くが文学部の学部学生であったため、専門的な研究の紹介はわずかにとどめ、基礎概念の解説に力点を置いていただいた。

解説はまず、英語queerの持つ語義から始まり、もともと非常に蔑視的な意味合いを持つこの語が、いかにして理論を表現する言葉へと転換して行ったかが説明された。女性学からクィア研究への発展は、「自然」・「当然」とされてきた、セックス・ジェンダー・セクシュアリティの概念に対する、疑問・問いかけの連続であり、クィア理論の誕生は、生物学的性と社会的性と性的欲望／性行為の対象のさまざまな組み合わせの可能性を認め、流動性を主張することだったのである。この理論は現在、文学研究にも応用されており、その代表としてセジウィックの「ホモソーシャル理論」が紹介された。また、最後に、クィア理論は「異常な」他者を嘲り、非難する言葉であった「クィア」をあえて使用することにより、既

存のジェンダー規範への反発と、自分という概念が絶えず変化し続けていることを提唱するものであり、それは突き詰めれば、アイデンティティの問題へと辿り着く、重要な概念であることが提示された。

## 「台湾セクシュアル・マイノリティ文学概観」

白水紀子（横浜国立大学教育人間科学部・教授）



台湾クィア文学研究の、日本における第一人者である白水氏は、「台湾セクシュアル・マイノリティ文学」全4巻を編集・出版されたばかりである。氏には台湾における、セクシュアル・マイノリティ文学の展開とその特徴について、具体的な作品の紹介に分析を交えながら、詳細に語っていただいた。

まず紹介されたのは、台湾において「酷児」（クィア）の語が浸透していった過程である。台湾では1990年代以降、同性愛運動とクィア運動がほぼ平行する形で受容されていくが、その吸収力が高かった理由として、台湾人の意識の中にあるハイブリッド性が指摘された。台湾は歴史的に、民族的問題や、度重なる植民地経験によって、アイデンティティの揺らぎを絶えず経験してきたため、アイデンティティの固定化に対する反発というクィアの主張を、それほど抵抗なく受け入れられているのではないかということである。

その後、「晶晶書庫」というセクシュアル・マイノリティの専門の書店の存在や、官民が一体となって後援する「台北同性愛文化祭」、「アジアレズビアン映画祭」など、さまざまな運動がオープンな形で繰り広げられていることが紹介された。

次に、作家たちの作品と特徴とが紹介された。自らがゲイである白先勇の『孽子』、『ある鱷の手記』によってレズビアン作家の草分け的存在となった邱妙津、「クィア作家」として名高い洪凌、自身が同性間結婚をしてセンセーションを巻き起こした許佑生の「男婚男嫁」（『新郎新“夫”』）などである。作家たちは自身がゲイやレズビアンであることが多いが、台湾の場合、ゲイがレズビ

アンの作品を書いたり、異性愛作家がクィア作品を書いたり、他の国では見られない特徴があるという解説も加えられた。中でも興味深かったのは、「東アジアにおけるホモ・フォビアと沈黙の寛容」という問題の提示である。通説として、日本やアジアでは同性愛者に対する抑圧は非常に少なかったとされているが、それは自分と関係がない場合に限り、実際に自分の身内、家族にそう人がいるとなると、わかっていながら無理やり結婚させるような行動に走る。そのような現実がアジアには残っており、家族のポリテクスが、激しい抑圧ではなく、家族の愛というベールをかぶって、西洋とは違う形でのホモ・フォビアを再生産し続ける現状があるということであった。

最後に、今回出版された作品集で、白水氏自身が翻訳を手掛けられた紀大偉の「膜」について、詳細な紹介と解説、および分析がなされた。未来世界において、脳だけで生きることになった少女「黙黙」と、彼女を操り、偽の記憶を植え付ける多国籍企業の存在や、レズビアンカップルである母親との関係などが複雑に絡みあうSF作品「膜」には、若い女性の皮膚感覚や記憶の問題、母との関係などさまざまな要素が渦巻いている。白水氏の中でも、19世紀の作家ギルマンの『黄色い壁紙』に描かれる、狂気の女性と主人公との関係性や、サイボーグとしての黙黙というあり方に注目し、「膜」の持つクィア性が、どのように現実のジェンダー関係を映し、乗り越えて行っているかを解説された。



本シンポジウムは文学部との共催事業ということもあり、学生の参加を強く促すと同時に、一般の聴衆を広く募ることを意識しての広報活動を行った。結果、コラボレーションセンターZ306教室から人があふれるほどの盛況ぶりで、講演後には学生からいくつもの質問が出た。ジェンダーやセクシュアリティの問題にはまだまだ検討すべき点も多く、研究としての広がり期待されていることが、聴衆の反応から明らかになった。今後もこのような共催活動を続けていくことが重要であろう。（文責：高岡尚子）

# 台湾女性研究者によるジェンダー講演会

講師：張小虹氏（台湾大学外国語文学系教授）

演題：「愛の不可能な任務について

— 映画『ラスト、コーション』に描かれた性・政治・歴史 —

日時：2009年10月17日(土) 15:00~17:00

共催：関西中国女性史研究会 後援：台湾・行政院文化建設委員会

講演者の張小虹氏は台湾のジェンダー研究を牽引する研究者の一人として、フェミニズム、脱構築、精神分析、ポストコロニアルといった理論を駆使し、従来にはない新たな観点を提起し続けている。その研究対象は文学作品だけにとどまらず映画や劇、大衆文化にまでわたっている。今回の講演では、張氏は2007年に公開され（日本では2008年公開）、各国でセンセーションを巻き起こした映画『ラスト、コーション』に鋭く切り込んだ。会場には学内はもちろん学外の研究者や学生もつめかけ、講演後の質疑応答でも活発な意見交換がされた。

アン・リー監督の映画『ラスト、コーション』(Lust, Caution 2007)は、40年代の日本占領下の上海を背景とし、愛国のため蒋介石国民政府のスパイとなる女子大学生・王佳芝(ワン・チアチー)を主人公としている。あらすじは、王佳芝は日本傀儡政権である汪精衛政府の高官・易(イー)を暗殺する任務を受け、彼に接近して愛人になるが、最後に易への愛に気付いて彼を逃がしてしまう、というものだ。この映画は、過激なベットシーンが描かれていることから多くのメディアの注目を集めた。また政治的な面からは対日協力者である易——「漢奸[漢民族の裏切り者の意]」を美化し、愛国烈士としての王佳芝を貶めたとして批判された。こうしたセンセーショナルな作品について、張小虹氏は意味深長に描かれた「愛国主義」に着目し、以下のように提起した。

『ラスト、コーション』において、愛国の情動とは人に生来備わっているものではなく、人と人との関係や接触で生まれる社会的なものであり、絶えず「召喚」され、強化される遂行的(パ

奈良女子大学アジア・ジェンダー文化研究センター

## 台湾女性研究者によるジェンダー講演会

日時：2009年10月17日(土) 15:00~17:00

場所：奈良女子大学 生活環境学部A棟大会議室  
(近鉄奈良駅より徒歩5分)

講師：張小虹氏 (台湾大学外国語文学系教授)

演題：「愛の不可能な任務について  
— 映画『ラスト、コーション』  
に描かれた性・政治・歴史 —

共催：関西中国女性史研究会  
後援：台湾・行政院文化建設委員会  
お問い合わせ：奈良女子大学・文学部・野村弘子 電話 0742-20-3977



フォーマティブ)なものであることが表現されている。例えば王佳芝が大学の抗日愛国劇の公演で主役を演じるシーンでは、彼女が舞台上で「中国を滅ぼしてはいけない！」と叫ぶと、観衆も愛国心をかき立てられ、立ち上がってともに同じ台詞を叫ぶ。ここでは音声の「召喚」によって舞台と客席が一体化し、「愛国の共同体」が形成される様子が描かれているのだ。

また愛国の「愛」と人を愛する「愛」は「自己同一化」という点で本質的に差異のないものであり、相互に変換可能なものとして描かれている。王佳芝はもともと切実な愛国心を持っていなかったが、王が思いを寄せる学生リーダー クワン・ユイミン 顧裕民や、親友の ライシュウチン 頼秀金の呼びかけによって「召喚」され、彼らを愛するがゆえに、易を暗殺する「愛国行動」に参加する。そして暗殺計画の最終段階において、王佳芝は易の自分への愛に心動かされ、そして自分も易を愛するがゆえに任務に背いて彼を逃がしたのである。ここでは愛は愛国を可能にし、またその一方で愛国を不可能にしたのであり、国を愛する愛があれば、人(たとえそれが「漢奸」であっても)を愛する愛もあるのだということが描かれている。

この映画で描かれたベッドシーンには、のぞき見の感覚はなく、性・権力・ジェンダー・身体の緊迫した複雑な関係が表現されている。王と易のセックスはいつも緊迫した状態で行われ、これはふたりの心理的な警戒心や恐怖心を象徴している。この映画のベッドシーンの綿密な描写は、従来のスパイ映画が避けてきた「ベッド上での任務」をクローズアップし、さらに女としての王佳芝の「性の任務」の難しさを強調しているのだ。

従来の愛国映画では汪精衛政権の「漢奸」を非情な売国奴として描いてきたが、この映画では易を繊細な内面を持ち孤独を抱えた人物として描いている。さらに易が身を置く私的・公的空間(孫文の肖像や中華民国国

旗、国民党党旗といった政治的記号にあふれている)や、彼の服装(中山服)を通して、汪精衛政府が孫文(国民党)の継承という正統性を作り出そうとしていること、さらに汪精衛政府と蒋介石政府が元々は同じ国民党であり、同じ根源にあることが表現されている。これにより二つの国民党への忠/奸、愛国/売国の区別を曖昧にし、国を愛する中国人同士が互いに争いあうという、「愛国主義」に内在する歪みを描き出しているのである。

アン・リー監督は台湾という民族アイデンティティが分裂した国家で育ち、またアメリカに移民した後は中華民国国籍を持つ外国人となった。こうした「離散した主体」としての境遇が背景にあって、彼はこの映画において愛国主義の歪みや継承の正統性に対する焦りを描いたのだといえる。

講演後は以下のような質疑応答がなされた。『ラスト、コーション』はスパイ映画ではなく愛国映画なのか、という質問に対し、張小虹氏は次のように回答した。今回の講演では愛国主義に焦点を当てたが、この映画には愛国主義を積極的に描いている箇所もあるが、同時に様々な愛(民族、国、友人、恋人)を描いている。また愛国主義の解体と強化が両方とも表現されており、実に多義的な意味を持っているのだ、と。また映画の原作が著名な女性作家・張愛玲の短編小説であることから、映画と原作ではどのような違いがあるのかという質問がされると、張小虹氏は以下のように答えた。原作でも女性の性を主要なテーマの一つとして描いているが、映画と違ってベッドシーンの描写はなかった。それは張愛玲の時代の中国社会では女性がそれを描くのは憚られたためであり、映画ではそのベッドシーンを大きく取り上げることで、女性の性のテーマを強調したのである。

(文責 羽田朝子)

# 「進路選択に及ぼすジェンダーの影響」その後

松岡由貴

2009年3月に行った研究会「進路選択に及ぼすジェンダーの影響 理系の進路選択をめぐる諸要因」では、本学の2回生を対象に行った「進路決定に関するアンケート」解析結果を基に、学部・学科ごとの「算数・数学、理科に対する意識の推移」や、「家族の理系率」などについて報告した。

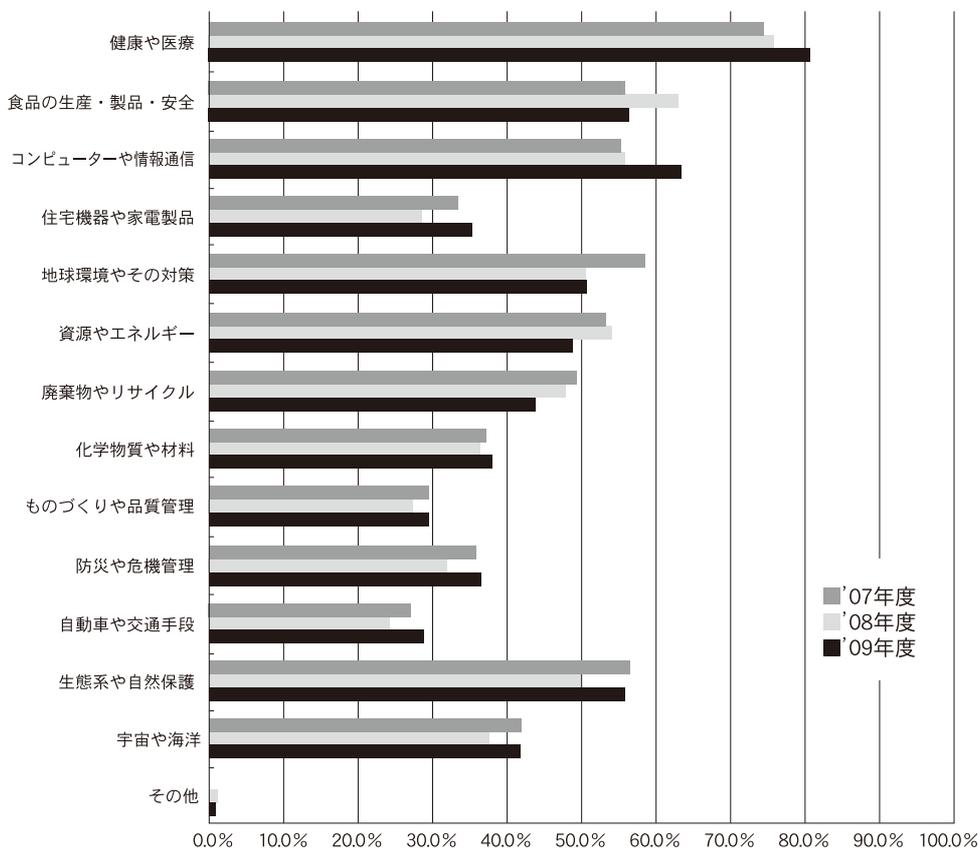
この時、ゲスト講師として来ていただいた山梨大学大学院 鳥養映子先生に”進路選択に及ぼす家族(特に理系の家族)の影響”について特に興味を持っていただき、このご縁で2010年1月に国際高等研究所の研究プロジェクト「女性研究者と科学技術の未来」の研究会において、アンケート解析結果を報告させていただいた。

アンケートは2007、2008、2009年度の3年に渡って実施しているが、集計・解析の都合上、主に2008年度の結果について報告した。(解析結果の詳細は昨年のニュースレターで既に報告されているので、今回は割愛させていただきます。)

ただし、「必要と思う科学技術の知識は?」という設問に関しては年度ごとに傾向の変化が見られたので、この設問に限り、3年分のデータを用いた。

同プロジェクトの研究会ではこれまでも「理系の進路選択振り返り調査」や、「中・高校生とその親の、科学に対する意識調査」の報告がなされてきたが、理系・文系、また、理系の中でも更に専門分野を分けて集計したアンケート調査報告の例は他には無かったので、「同じ理学部内でも、数学や理科の好き嫌いの度合いに違いがある」という事実は、参加者の方々には意外だったようである。

「家族の理系率」については、他の調査ではあまり調べられていないこともあってか、研究会参加者の方々にも特に興味を持っていただけたようだ。「兄弟姉妹間の影響は大きく、姉や兄が理系であれば妹や弟も理系の進路や科学に興味を持ちやすいようだ」という解析結果に対して、けいはんな地区で子ども達を対象に理科実験クラブを主催しておられる方から「確かに実験参加者の兄弟姉妹が、実験の場に一緒についてくる例は多い」とのコメントをいただいた。我々が得た解析結果に裏付けが得られたわけである。理系に進学する女子生徒・学生を増やすには、理系の姉や兄(もしくは姉・兄



必要だと思う科学技術知識の種類 経年変化 (理学部)

同様に仲良くしている人)に誘われて科学に触れる場を増やすことが有効で、そのような試みが今後増えることを願っている。

両親の「科学技術に関するニュース・話題への関心」は子ども(回答者)の専門分野に寄らず、似た傾向を示した。かろうじて差異を見つけようとするならば、理学部学生の母親が、最終学歴があまり高くなくとも「関心がある」率が高かったことである。やはり、女子にとって母親の影響は大きい、ということかも知れない。

「必要だと思う科学技術知識」の解析結果では、「どのような科学技術分野の知識が必要か」と考えるかには専門分野の違いが表れた。(図1)それぞれの科学技術分野と専門分野が大体対応しているの、これはある程度予想された。また、「健康や医療」のように、社会的に大きな関心をひく事件が起きた分野では、年々「必要」と答える率が上がっているのも、妥当な結果だと言える。しかし、面白いことに、理学部よりも文学部・生活環境学部の方が、ほぼ全ての科学技術分野において「知識が必要」と答える率が高かった。

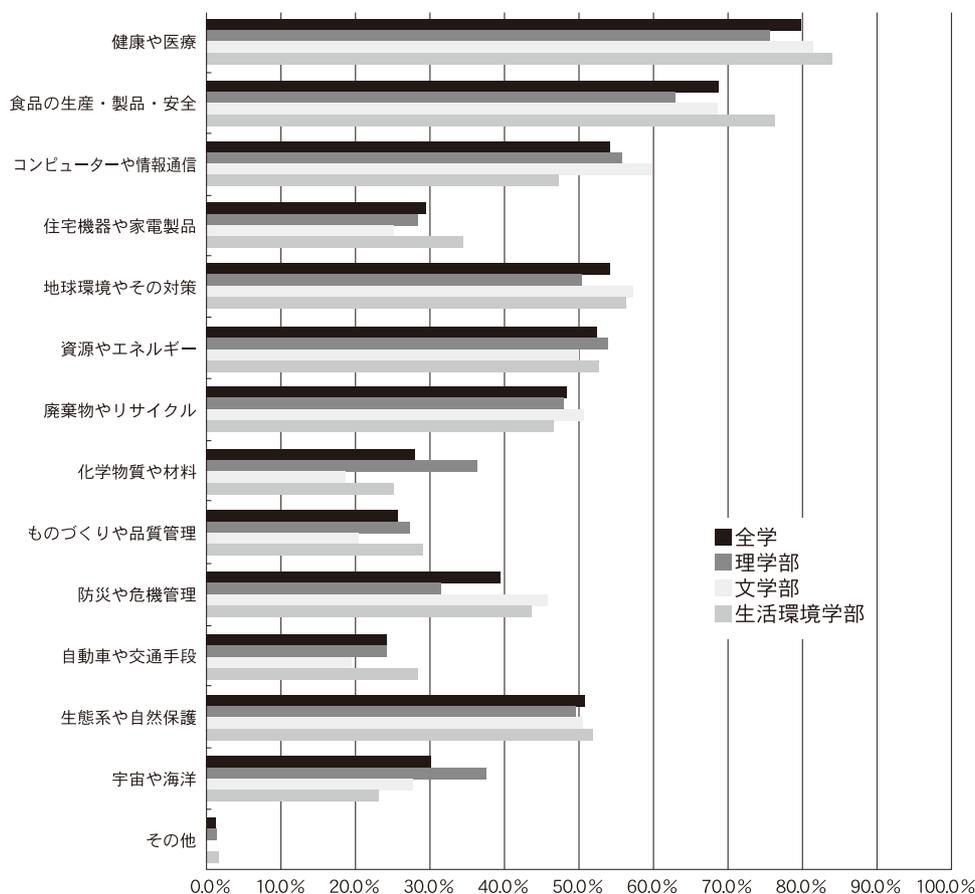
これは、「算数・数学や理科が好きでなくとも、科学技術知識自体は必要」という冷静な判断意識の表れなのか、

理解できないからかえって必要だと感じられる”(「隣の芝生は青い」的)意識の表れなのか、知りたいところである。現段階までの解析結果をまとめてみると、女子生徒・学生が理系か文系かを選ぶとき、親だけでなく兄弟姉妹の影響も無視できないことは上で述べたように明らかである。理系の家族、学歴の高い親がいるほど、理系に進む率は高くなっている。

家族以外で影響が大きい存在として「先生」が挙げられる。というのは「先生に薦められて」現在の学部・学科を選んだ、という回答が比較的多かったのだ。先生が男女を問わず生徒の適性のみを見て、現在回答者が在籍している専門分野を薦めたか否か、は、ジェンダー的な視点で見ると重要な要素ではないだろうか。

同プロジェクトの研究会には、佐保会理事長である川崎和子先生もメンバーとして参加しておられる。そのため、講演後の質疑応答では他の参加者から「佐保会と連携して、大学入学まもなくの時期と、大学卒業の時期で学生の意識がどう変わったかを追跡調査してみてもどうか」とのご提案もいただいた。

女性の進路選択に影響を及ぼす要因について、人生の各ステージ毎に調査するのも、なかなか興味深いと思う。



必要だと思う科学技術知識の種類 全学・学部別 (08年度)

## プロジェクト研究

# 「帰国留学生のキャリア形成とライフコースに関する調査I」

松岡悦子



私が初めて本学の留学生に関心をもったのは、たまたま調査で訪れた中国で通訳をしてくれた女性が、奈良女子大学の修士課程を修了していたからだった。彼女は奈良に留学中、地域の人たちに親切にしてもらい、とても楽しかったと述べたが、その話は意外なこととして私の記憶にずっと残っていた。なぜなら、アジアからの留学生の多くが、日本社会で寂しい思いを抱えながら、ひたすら学位を取るために勉強しているという先入観があったからだ。

それからわずか2-3年後に奈良女子大学に勤めることになった私は、留学生たちが上手に日本語を喋って、大学生活にとけ込んでいるのを知り、本学の留学生対応の歴史の厚みを感じた。また当然のことながら、帰国した留学生は本国でエリートとして高い地位を得、社会で大きな活躍をしていた。そのような事実を知るにつけ、本学がアジアの女性人材の育成に果たした役割や、留学生のキャリアパスを知ることは、アジアでの奈良女の役割を再確認することにつながるものと思われた。折しも2009年は、奈良女子大学100周年の年であった。そこで、アジア・ジェンダー文化学研究センターの研究の一環として、本学のプロジェクト研究費を得て調査を始めた。今回は、2009年10月に訪問した韓国の3人の元留学生について報告したい。まず、今回話を伺った3人のプロフィールを紹介する。

### 辛美慶さん（圓光大学校 名誉教授）

（1943年生、留学期間：1970年～73年 食物学専攻）

ソウルの漢陽大学を卒業後、文部省の留学生試験を受けて合格した。奈良女子大学の修士課程食物専攻に入り、梶田先生のもとで緑茶の研究を行った。朝7時半から夜11時頃まで研究室にいて、土曜日洗濯し終わるとまた研究室に行った。研究室では順番にお茶を入れて、1日に5回一緒にお茶を飲んだ。韓国に戻って2年間非常勤講師をした後、35才で圓光大学の教授になり、36才で結婚。男女2人の子どもがいる。子どもが高校生になるまで、住み込みのお手伝いさんを雇っていた。

### 崔正和さん（ソウル大学衣類学科教授）

（1946年生、留学期間：1973年～75年 被服学専攻）

良い奥さんになりたくて、ソウル大学家政学部に入學した。卒業後しばらく公務員をした後、大学に呼び戻されて助手になり、文部省の奨学金を得て留学した。寮の4人部屋で日本各地から来ている学生と友達になり、楽しかった。本学で修士号をとり、博士号を神戸大学医学部でとった後に、33才でソウル大の農学部教授になった。36才で結婚し、2人の子を出産した。お手伝いさんを2人雇い、子どもが小さい間も夜9時頃まで大学で仕事をした。

### 申京珠さん（漢陽大学校室内環境デザイン学科教授）

（1950年生、留学期間：1974年～78年 住居学専攻）

佐保会韓国支部の会長をしている。嶺南大学を卒業後、日本の文化女子大学に留学したが、すぐに奈良女に移った。研究室では常に日本の教育放送を聞きながら勉強し、皆が帰った後も夜の12時頃まで勉強した。修士課程を終えるときに、母校の嶺南大学から教授で来るように要請されたが、大阪市立大学の博士後期課程に進学し、1983年にソウルの漢陽大学に就職した。

女高師時代に韓国から留学していた人たちはすでに高齢のため、実質的にこの3人が話のできる高齢の元留学生だった。今回は、3人別々に話を聞くと同時に、3人一緒に思い出を話してもらった。通訳はほとんど必要なかったが、日本在住の元留学生の黄貞允さんに同行してもらった。

今回の面談の感想を以下に述べる。まず、韓国では1980年代初めまでは、博士号があればどの大学にでも就職できたそうだ。崔さんも申さんも、学位が取れる頃に、職を用意して待っているとされている。ところが90年代入ると、アメリカ帰りが圧倒的に有利になり、英語で授業ができることが就職の条件ようになる。日本への留学は、その点だけをとっても不利になった。彼女たちは、帰国後も奈良女子大学を外から眺め、本学の現状に対して中々手厳しいコメントを述べていた。しかし、これらの意見は本学を客観的に見るための貴重な視点に思われた。



## スリランカの 女性リサーチセンター

# 「センウォー」CENWOR

岩崎 雅美

近年政情が安定したスリランカを2009年8月末に訪問した。スリランカは紅茶や仏教遺跡で有名であるが、セイロンと呼ばれていた1960年に、世界初の女性首相(シリマヴォ・バンダラナイケ)を選出している。1978年に「スリランカ民主社会主義共和国」に改称し、民主主義と社会主義の両方の良いところの導入をはかっている。大学では、古都キャンディ市にあるペラデニア大学UNIVERSITY of PERADENIYAが代表である。広大なキャンパスは元紅茶畑であったが、建物のあちこちに仏教寺院の様式や文様が組み込まれ、仏教色が大学にも及んでいるが、パゴダに加えてチャーチやモスクもキャンパス内に配置され、宗教上の公平さが保たれている。

さて、コロンボ市内の一角に女性のリサーチセンター「CENWOR」(Center for Women's Research)がある。1984年に退職した元大学教員ら8名で創設したNGOで、25年の歴史をもつ。初期はオランダの援助を受けていたという。オフィスは二階建てで、一階に5室ほどの部屋、二階に50人くらいを収容する会議室と3つの部屋を有する快適なセンターである。女性に関する様々なリサーチを行い、それを雑誌や書籍に発表し、それらの販売により収益を得ている。



写真1 「CENWOR」のメンバー(左端が代表者)

現在30名ほどのスタッフで、男性1名と若い女性を含む12名は給料をもらい、その他はボランティアである。訪問した日は、創設時からの3名のメンバーを含む委



員が集まり会議をしていた(写真1)が、気持ちよく迎えてくれた。CENWORは調査や統計的なデータ作りにはかなりの技術を持ち、多くの成果をあげている。現在は、若い人へのアピールに力を注いでいるが、問題点は資金繰りのようである。



写真2 オフィスで働くスタッフ

オフィスではサリー姿と洋服が半々くらいであったが、若い人は皆シャツとパンツの簡易な洋服である。コンピュータの操作や書類整理などの仕事が主なので、サリーでも問題はない(写真2)。一階の図書室にはこれまでの成果である書籍や雑誌、政府発行の資料などが数本の本箱にぎっしりと配置されていた(写真3)。



写真3 図書室

スタッフの女性からは25年の実績が自信のように感じられ、はつらつとして魅力的であった。スリランカは1981年に「女性差別撤廃条約」を批准するなど、南アジアの中で

もかなり進んだ国である。ちなみに日本は1985年である。しかしこの国にも問題は多く、例えば、高い地位の女性が少ない、女性には限られた職種しかない、紅茶畑で働く女性の低賃金と家族問題などが挙げられる。

## 視覚表象をジェンダーの 視点から研究すること

山崎明子

私たちの日常生活は様々な視覚表象に満ちている。普段、そう認識していなくても、ひとたび目を開けば何らかの表象が飛び込んでくる。電車の吊広告、都市の看板、雑誌、テレビ・・・暮らしはそのような視覚表象であふれ、一人ひとりが洪水のように押し寄せる表象の海の中で時に溺れそうになりながら生きている。

私が視覚文化研究に引き込まれたのは、美術史を学び始めた時だった。美術作品は美しいと無条件に信じていた私は、「美術」を成立させているものが社会制度であり、人の視覚そのものが制度に立脚したものであるということ、また「美術」作品とは必ずしも美しいわけではないということや、その政治的な意図を読み込んでいく楽しさを知ったのも、恩師の故・若桑みどり先生の講義の中であった。

表象は一つの画面の中で完結するものではない。その背後に表象が生み出された社会があり、社会は様々なシステムに支えられている。私たち表象研究に携わる者が一枚の表象にこだわり続けるのは、そこに想像を超えた社会や文化の断片を見出し、一枚の表象を入口に人々が表象に託した意志や社会の欲望を読み取っていくことの意義を確信するからである。

表象は社会の欲望の集積であり、また欲望を刺激する装置でもある。広告も、美術作品も、映画も何らかの欲望の装置であり、それが共有されるからこそ「歴史」の中にその痕跡を残し、広範な消費へと結びつく。その表象がジェンダー規範とどのように関わり、いかにジェンダーシステムの再生産・再構築に関与するのかを明らかにすることが、私の研究テーマである。

昨年、研究仲間とともに取り組んだプロジェクトは「乳房の表象」であった。歴史的に、むき出しの乳房は性的イメージと医療イメージ、そして母性イメージの三つの局面で突出して生産されてきた。近世イタリアのペスト惨禍の救済図像の中では、乳房を持つマリアとエヴァに健康と病のイメージを集約し、マリアに善と健康なる身体を、エヴァ（普遍的な女性）に悪と病む身体を

象徴させた。戦時下の日本映画の中では、「大陸での民族繁栄」が、「満洲」に移民した女性の乳房にシンボライズされ、逆に、病む乳房を持つ内地の女性身体には、「涸渇した国土」という意味が付与された。そして現代の日本では乳がん撲滅キャンペーンの中で、健康な乳房を美として描きだし検診を受けないことの恐怖を美の喪失という文脈で語る。

乳房の表象は普遍的でありながら単一ではない。しかしそこには乳房を持つものと持たないものを分かち、視覚的に受容する側と受容される側に引き裂き、乳房を持つ者たちへの威嚇装置にもなり得るといった共通性がある。（ご興味のある方は『イメージ&ジェンダー』10号、2010年3月刊行をご参照ください。）

乳房のイメージは、より身近にセクシャルなアイコンとして氾濫している。誰かが乳房を持つ身体を視覚化していく様子を、私たちは目をつぶって黙って見過ごすこともできるし、声をあげて批判することもできる。また、視覚文化研究者であれば、その表象に潜む欲望の存在を指摘し、抑圧の構図を浮き彫りにすることもできる。なぜ抑圧の構図が見えるかといえば、視覚システムとはそもそも権力構造を持ち、見る―見られる、描く―描かれるという関係性は社会において対等ではないからである。この非対称な関係性は視覚文化と切り離せない。

歴史的に女性は描かれる側に置かれることが多かった。「それは女性が美しいからだ」と簡単に言う前に、何を美しいとし、なぜ女性に美の価値を見出し、なぜ女性を美しく描くのかを問わなければならない。世界の女性たちが均一な美の基準の中にいるわけでも、美しい男性がいないわけでもなく、女性を醜く描いた図像も多くある。社会的に構築された価値を私たちは学習し、自身に内在させている、だから学ぶ必要があり知る必要があると私は考えている。

また、ジェンダー研究とは、社会のジェンダーシステムを追究していく研究であるが、究極的には人の尊厳に関わる差異化と抑圧の構図の究明である。ゆえに今の社会に必要な学問であり、またこれから社会に出ていく学生たちが学んでおかなければならないことで、決して女性だからジェンダー論を学ばなければならないのではない。自分もまた抑圧のシステムを強化・再生産する可能性を持つ社会の一員であるから知らなければならないのだ。そうやって学んだことが世界の一端を変える可能性がある——私は恩師や多くの研究仲間からそう学んできた。

# 奈良女子大学

## 女性教員数

2010

安田恵子

平成21年度内閣府男女共同参画白書によれば、平成20年の我が国における女性研究者総数は114000人で、総研究者数の13.0%に当たり、緩やかな上昇傾向をみせている。しかし、欧米諸国の女性教員数、アメリカ合衆国の34.3%、イギリス26.0%などと比較するときわめて低い値と言わざるをえない。女性教員を増加させるための様々なアクションプランが試みられているが、成果があまりあがっていないのが現状である。アジア・ジェンダー文化学研究センターでは、これまで奈良女子大学における女性教員数の推移について調査してきた。今回は2010年1月末現在の女性教員数について報告する。

奈良女子大学の総教員数は204名、女性教員は56名27.5%で(表1)、2007年からは非常に緩やかな上昇傾向を見せてはいるものの、1993年の27.0%からはほとんど変化がない(図1)。

学部別に見ると、学部ごとに異なった推移を見せている。文学部では、女性教員数は現在19名26.0%であるが、1993年には15.5%という低い値であったが年々上昇してきた。学科によっても差がみられ、人文社会学科では14.8%であるが、言語文化学科33.3%、人間科学科31.8%と比較的高い比率になっている(表1)。理学部では女性教員数12名、15.4%で、文学部とは対照的に1993年の23.2%から徐々に低下している(図1)。学科別に見ると、化学科6.3%、物理科学科10.5%と低く、比較的高い学科でも数学科23.1%、情報科学科21.4%と他学部と比較して低い(表1)。生活環境学部では女性教員数25名、47.2%で、1993年から一時減少したものの、2003年から再び上昇し、一環して40%以上の高い女性教員比率を保っている(図1)。また、どの学科も35%以上と高い比率である(表1)。

奈良女子大学で女性教員数が伸び悩んでいる原因のひとつは、理学部による女性教員数の伸び悩みである。全国的に工学・理学系の女性教員比率は他の分野に比べて低いことが知られている。この背景には我が国では理系の進路を選ぶ女子が男子に比較して低いという

現実がある。長い目で見て理系をめざす女子の数を増加させることが、我が国における理系の女性教員数を増加させることに繋がると考える。

国立大学協会が設定した女性研究者割合目標は2010年までに20%、第三期科学技術基本計画で設定された目標値は自然科学系の女性教員割合を5年間で25%にするというものである。現在、奈良女子大学では、女性教員比率27.5%、理学部と生活環境学部を合わせた理系の女性教員数では26%であり、その目標はすでに達成してはいる。しかし、数少ない理系の学部を持つ女子大学であり、高等教育を受けた女性を多く輩出してきた歴史から考えると、この数値に満足すべきではない。内閣府男女共同参画白書によれば、高等教育段階の女性の割合は、大学院博士課程で31.1%あり、女性教員比率を高くする余地は現時点でもまだあるといえる。2008年に行われた男女共同参画学協会連絡会「科学技術専門職における男女共同参画実態の大規模調査」によると、女性研究者が少ない理由としては、家庭と仕事の両立が困難なことや、育児期間後の復帰が困難であることが上位になっている。国立大学法人お茶の水大学は、本学と同様の女子大学で、教員数も218名、規模もほぼ同様であるが、2009年に45.9%の女性教員比率を達成し、さらに50%を目指すという。お茶の水大学では、保育所の設置や「9時-5時」勤務実施のための全学的な意識改革に取り組んでおり、成果をあげていると思われる。全国的に女性教員数を増加させる試みが始まっており、その成果が期待されるが、ただ女性教員数を増加させればよいのではなく、女性研究者の育成、女性教員の働きやすい環境整備が今後の課題である。

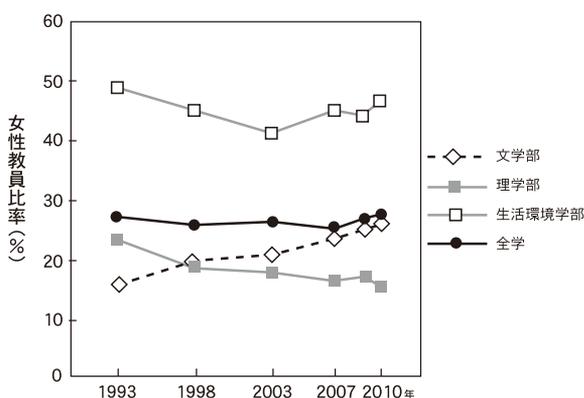


図1 奈良女子大学における女性教員比率の推移

表1 奈良女子大学における女性教員数・男性教員数

2010.1.31現在

文学部			理学部			生活環境学部		
学 科	女性教員数	男性教員数	学 科	女性教員数	男性教員数	学 科	女性教員数	男性教員数
人文社会学科	4 (14.8%)	23 (85.2%)	数 学 科	3 (23.1%)	10 (76.9%)	食物栄養学科	9 (60.0%)	6 (40.0%)
言語社会学科	8 (33.3%)	16 (66.7%)	物 理 学 科	2 (10.5%)	17 (89.5%)	生活健康・衣環境学科	5 (35.7%)	9 (64.3%)
人間科学科	7 (31.8%)	15 (68.2%)	化 学 科	1 (6.3%)	15 (93.8%)	住 環 境 学 科	5 (41.7%)	7 (58.3%)
			生 物 学 科	3 (17.6%)	14 (82.4%)	生活文化学科	6 (50.0%)	6 (50.0%)
			情 報 学 科	3 (21.4%)	11 (78.6%)			
	19 (26.0%)	54 (72.6%)		12 (15.4%)	66 (84.6%)		25 (47.2%)	28 (52.8%)

全学 女性教員数 56 (27.5%) 男性教員数 148 (72.5%)

※教員は学部所属する教授、准教授、講師、助教とした。

## 2009年度のセンターの活動

### ■センター主催の研究会・講演会

#### ●奈良女子大学創立百周年記念事業

奈良女子大学アジア・ジェンダー文化研究センター、  
ジェンダー史学会共催公開シンポジウム  
「近代アジアの出産と介助者 ―ジェンダーの視点から―」

日時：2009年6月6日(土)13:00-17:00

場所：奈良女子大学生活環境学部会議室

報告1

講師：松岡悦子(奈良女子大学教授)

「なぜ産婆は専門職化に失敗したのか

―戦前の「産師法案」をめぐる動きを通して―」

報告2

講師：傅大為(台湾・陽明大学教授)

「植民時期の台湾における医療の近代性と産・産婆」

報告3

講師：姚毅(フェリス女学院大学非常勤講師)

「近代中国における産科医と助産士の境界をめぐる  
ポリティックス」

コメンテーター：石崎昇子(専修大学非常勤講師)

司会：野村鮎子(奈良女子大学教授)

#### ●台湾女性研究者によるジェンダー講演会

「愛における不可能な任務について

―映画『ラスト・コーション』に描かれた性・政治・歴史―

日時：2009年10月17日(土)15:00-17:00

場所：奈良女子大学生活環境学部会議室

講師：張小虹(台湾大学外文系教授)



#### ●文学部言語文化学科ジェンダー言語文化学

プロジェクト 第3回シンポジウム

アジア・ジェンダー文化研究センター 共催

「クィアと文学」

日時：2009年11月27日(金) 14:40-16:30

場所：奈良女子大学コラボレーションセンター Z306

講演1 講師：中川千帆(奈良女子大学准教授)

「クィアとはなにか」

講演2 講師：白水紀子(横浜国立大学教授)

「台湾セクシュアル・マイノリティ文学概観」

後援：台湾・行政院文化建設委員会

#### ●公開講演会

「家族―義務？ それとも魅力的な商品なのか？」

日時：2010年3月23日(火) 14:00-17:00

場所：奈良女子大学F棟5階会議室

講師：バーバラ・カツ・ロスマン(ニューヨーク市立  
大学教授)

後援：奈良女子大学家政学会

#### ■アフガニスタン女子教育支援

2009年度JICAの青年研修(アフガニスタン女子教育)  
が五大学コンソーシアムの協力で行われました。本学  
には1月22日～23日に15名(全て女性)が来学され、  
食生活と健康の講義、附属小学校での育友会の活動視  
察、東大寺の見学などの研修を提供し、センターの委  
員がこれに協力しました。

#### ■調査

- プロジェクト研究「帰国留学生のキャリア形成とライフコースに関する調査」
- 「学生の進路選択に関するジェンダー意識―理系をめざす女子の進路選択の要因―」
- 奈良女子大学女子教員数の変動

### 組織

センター長：野村鮎子(文学部)

運営委員：高岡尚子(文学部)、安田恵子(理学部)、岩崎雅美(生活環境学部)、  
松岡悦子(生活環境学部)

メンバー：出田和久(文学部)、内田忠賢(大学院人間文化研究科)、鈴木則子(生活環境学部)、  
鶴田幸恵(大学院人間文化研究科)、増井正哉(生活環境学部)、松岡由貴(理学部)、  
山崎明子(生活環境学部)、吉田容子(文学部)

事務担当：研究協力課

連絡先：アジア・ジェンダー文化研究センター事務局

〒630-8506 奈良市北魚屋東町 コラボレーションセンター2階 (Z202)

TEL :0742-20-3611 FAX :0742-20-3612

E-mail : a-gender.c@cc.nara-wu.ac.jp

### 編集 後記

#### 「アジア・ジェンダー文化研究センター室開設!!」

センターについて専用室が開設されました。来年度からは特任助教が専用室に常駐し、センターの活動の拠点となります。アジア・ジェンダー文化研究センターの活動を見にぜひ専用室を覗いてみてください。

今年度は、奈良女子大学創立100周年記念公開シンポジウム「近代アジアの出産と介助者―ジェンダーの視点から―」、台湾女性研究者によるジェンダー講演会、文学部言語文化学科ジェンダー言語文化学プロジェクトとの共催によるシンポジウム「クィアと文学」を開催しました。どの会も盛況で活発な意見交換が行われました。調査研究としては「帰国留学生のキャリア形成とライフコースに関する調査」をあらたに開始しました。ニュースレター第9号ではこれらの活動をお伝えいたします。今後とも温かいご支援をお願いいたします。(安田恵子)